

生成AIと知財業界 – ブログ企画2025まとめ

現状と活用事例：知財業務に押し寄せる生成AIの波

生成AIは既に知財業務の生産性を飛躍的に向上させつつあります。多くの弁理士や知財専門家が、日常業務にChatGPTなどの生成AIを導入し始めました。たとえば、特許翻訳者のブログでは、英語メールの返信文を即座にプロ並みに下書きしてくれることや¹²、専門外の技術用語の解説をChatGPTに頼んで理解を深めることなど³、生成AIが日常業務の「下支え役」として大活躍していると報告されています。また、長大な化学物質名の和訳など人間には煩雑な翻訳も、一連の指示（プロンプト）を工夫してAIに任せれば手動より速く正確にできるといいます⁴⁵。すでに 特許翻訳や国際出願書類の翻訳でAIを使うのは「あたり前」との声もあり、あるベテラン弁理士は「もう人間翻訳には戻れない。人間の方がミスが多い」と述べたそうです⁶。

明細書作成や特許調査にも生成AIの威力が現れています。商標サービス企業のブログでは、自社開発の生成AIツールによって「商標調査を従来の数十倍の効率」でこなせるようになったと報告されています⁷。少人数の弁理士でも月650件近い商標出願代理を処理できたのはAIのおかげだといいます⁸。さらに驚くべきは、特許明細書のドラフトをAIエージェントでわずか10分で生成できたという実験結果です⁹。もちろん内容には改善の余地があるものの、発明の技術情報を入力するだけで請求項から実施例まで形を整えた文書が即座に出力される様子は「驚異的」だとされています⁹。実際、従来はテンプレートやルールベースでしか不可能だった明細書自動作成が、プロンプト次第でかなりの精度で可能になったと複数のブロガーが指摘しています¹⁰。一部では「え、これ明細書書けちゃうじゃん」と業界の空気がガラッと変わったとの声もあります¹¹。

日々のコミュニケーションや資料作成でも生成AIが“秘書役”を担います。弁理士のブログによれば、対庁書類のドラフトはまだ模索中でも、クライアント向けメールなど自由記述文はChatGPTに骨子を提案させたり、文章を修正させたりしているとのこと¹²。講演資料の項目出しでも生成AIは「大いに活躍」し、与えたテーマに沿って的確な項目案を列举してくれる¹³。他にも、「定期的に走らせる商標ウォッチ（トロール対策）やエゴサーチを自動化する子たちを育成中」といった報告もあり¹⁴、特許事務所のDXにおいて生成AIは“救世主”になりそうだと期待する声もあります¹⁵。

このように、生成AIは知財実務の様々な場面で「なくてはならないツール」になり始めています¹⁶。ChatGPT公開（2022年末）からまだ数年ですが、「あっという間に普及し、今やAIなしで業務を行うことは考えられない」とまで言われています¹⁶。日本弁理士会（JPAA）もいち早く「弁理士業務におけるAI活用ガイドライン」を公表し業界全体でルール整備を進めています¹⁷。実務家向けの研修でも「生成AI」の文字が入った講座は大人気で、募集即満員になるほどです¹⁸。総じて、知財業界は今、生成AIという“ホットなテクノロジー”の恩恵を受け始め、日常業務の効率・速度・量が劇的に向上しつつあることが各ブログから読み取れます。

生成AIが変える業務内容と専門家の役割

生成AIの進化に伴い、知財専門家の役割は大きく転換しつつあります。複数のブロガーが共通して指摘するのは、「AIに任せる業務」と「人間が担うべき業務」の線引きが今後鮮明になるという点です。かつて「弁理士業務の91.3%はAIに代替され得る」といった記事が話題になりましたが¹⁹、現実にはすべてが置き換えられるわけではなく、定型的で多少のミスが許容される業務から順にAIが代替していくだろうという分析があります²⁰。実際、特許情報の自動分類・要約や、図面作成、簡易な文章生成などはすでにAIが得意とする領域です²¹²²。一方で、侵害予防調査や無効資料の戦略的活用、IPランドスケープ分析のように高度な専

専門知識と洞察が要求される業務は「まだまだ人間の直感に依存する場面が多い」と指摘されています²³。異分野融合技術の発見や新規事業の示唆など、「これは何か面白い」と気づくセンスは当面は人間に軍配が上がるというわけです²⁴。

こうした中、知財プロフェッショナルの価値は「AIでは代替困難な部分」で一層高まると見る向きが多いのも特徴的です。たとえば特許検索や分析ツールを提供する企業は、サービスの競争力の決め手として「弁理士など専門家による監修」がますます重要になると述べています²⁵。AIの検索結果や要約にもとづいて特許性や戦略を判断するには、法律・技術の双方に精通した専門家の目が不可欠であり、経験豊富な弁理士のチェックが品質の決定打となるからです²⁶。実際、企業が特許ツールを選ぶ際には「どの弁理士が監修しているか」を重視する時代になるとの予測もあります²⁷。つまり、AI時代においては「AIを使いこなし、その出力を正しく評価・修正できる」専門性（ドメイン知識）が今まで以上に求められる²⁸ということです。

具体的に、人間の役割はどのように変わるのでしょうか？多くのブログが強調するのは、人間は“プロンプトエンジニア”としてのスキルを磨く必要があるという点です。明細書作成や図面作成は将来的にAIが担うようになり、人間は「どんな情報を、どう、どこまでAIに伝えれば適切な出力が得られるか」を知ることが重要になると解説されています²⁹。これはちょうど、3D-CADの登場で意匠図面作成にデッサン力が不要になった変化に似ています²⁹。具体的には、(1)技術的背景を正確にAIへ伝えるスキル、(2)意図する権利範囲を構造的に表現する力、(3)AIの出力結果を評価し微調整する判断力——これらが新たなコアスキルになるとまとめられています³⁰。言い換えれば、「AIに何を問うか、どう問い、どう権利化につなげるか」という高度な創造的業務が中心になる³¹という展望です。実際、一部のブロガーはChatGPTやGeminiに記事執筆を試させ、その「きれいにまとまった」出力を見てAI活用の可能性と限界を体感しています³²³³。AIが60%程度の叩き台を簡単に作ってくれる一方、残り40%を100%に仕上げるのは人間のセンス次第であり³⁴、こここそ人間の腕の見せ所だという指摘は示唆に富みます³⁵。多くの専門家が「最終的な仕上げや判断には人間が必要」³⁶³⁷だと強調している点からも、AIが作ったドラフトを解釈・評価し、採用可否を判断する役割が今後の弁理士の重要な仕事になると考えられます。

また、クライアントとのコミュニケーションや信頼構築といった人間ならではの業務の重要性も増すと見られています。商標実務のブログでは、「AIが全てできるようになれば弁理士不要だが、現実にはブランド戦略の判断やクライアントへの的確な提案は人間専門家の役割として残る」とし、クライアントとの対話や意思決定支援といった部分の比重が一層増大していくだろうと述べられています³⁸³⁹。別の弁理士は、自身のnoteで「顧客が『この人に相談してみよう』と思うきっかけを作るには、結局“この人はどんな人か”を知ってもらえない」として、ブログや動画で自分の考えや人となりを発信し続けています⁴⁰⁴¹。AI時代でも最終的に選ばれる専門家になるためには、人間らしさや個性、経験知に根ざした判断力を磨き、発信していくことが不可欠だという視点です⁴¹⁴²。実際、「クライアント自体がAIにならない限り、差別化要素は人間的要素しかない」⁴³とも指摘されており、AIで効率化しつつも、人間にしか提供できない価値（創造性や共感、倫理的判断など）をどう発揮するかが問われています。

懸念点と課題：法律の整備、品質管理、人間とAIの協働

生成AIの台頭に伴い、知財業界では新たな懸念点や課題も浮上しています。一つは法制度との齟齬です。著作権や発明者の扱いなど、現行制度が想定していない事態が既に起きています。複数のブログで話題にされているのが、「AIが生成したコンテンツに著作権は認められるのか」という論点です。日本の著作権法では人間の創作を保護対象としていますが、AIが自律的に作った成果物は著作物とみなされない可能性が高いとされています⁴⁴。ただし、人間が関与したプロンプト（指示）の工夫次第では創作性が認められる余地もあり、「人の創作性がどの程度関与したか」が今後の争点になるだろうと指摘されています⁴⁴。発明の世界でも、AIが生み出したアイデアの発明者は誰か（AI自身は発明者たり得るか）という問題が議論にのぼり始めています⁴⁵。日本特許庁も審査基準でAI関連発明に言及し、経産省が漫画形式の解説を公開するなど対応を進めています⁴⁶、いずれも「今後の進化を見守りつつ柔軟に対応する」というスタンスで、法制度側も手探り状態なのが実情です⁴⁷。あるブロガーは、AIは単なる一技術分野に留まらず開発環境や産業構造そのものを変えうるので、「近い将来、審査基準の微修正に留まらない制度改正に踏み込む可能性も否定できな

い」と述べています⁴⁸。つまり、法とAIの“ミスマッチ”が大きくなれば、著作権法や特許法そのものの見直しも視野に入るといことです⁴⁹⁴⁸。

もう一つの課題は、AI出力の「品質管理と信頼性」です。生成AIは便利だが誤答や幻影（ホールル）もあり得るため、鵜呑みにできないという点は専門家ほど強調しています。ある弁理士は「生成AIに完璧な答えを求めないよう注意している」と述べ、AIが60%の出来栄えのドラフトを即座に作れても³⁴、そこから100%完成形にもっていくのは難しいし、そもそも「100%のイメージ」がこちらに無ければAIに出せるわけもない、と冷静に分析しています⁵⁰。このため、「最後の仕上げは人間が責任を持って行う」という前提で使うべきだと強調しています⁵⁰。実際、多くのプロガーが“AI下書き+人間チェック”の体制を推奨または実践しており、AIが提案した契約書や意見書案をそのまま提出して良いか判断するのは人間の役割として残ると指摘されています³⁶。例えば、特許拒絶理由通知への対応業務は重要度に応じて段階的に自動化されるかもしれませんが、「提出すべき書面をどれにするか」「この対応方針でよいか」を決めるのは結局専門家の判断になるだろうと述べられています⁵¹。要するに、AIのアウトプットを最終責任をもって“使える形”にするフィルター役が不可欠なのです³⁹³⁶。この点、特許事務所では書面の品質責任を負う以上、生成AIに全面代替される未来は想像しにくいとも言われています⁵²。むしろ、AIを受け入れつつ品質を担保するために、入力様式を定型化してAIがミスしにくい環境を整え、人が最終修正する——そんな業務フローへの変革が求められるのではないかと考察されています²²。

労務管理やセキュリティ上の注意点も見逃せません。機密情報へのAI入力禁止という取引先ルールがあれば当然それを守るべきであり、公開前の明細書ドラフトを勝手にAI翻訳させることなどは厳禁です⁵³。一方で、公開済みの特許公報や一般技術情報であれば「この文章を翻訳して」と生成AIに頼るのは許容される場面もあるだろう、と使い分けの指針も示されています⁵³。データ漏洩のリスクや契約違反にならない範囲でAIを使うガバナンスは各所で模索されており、弁理士会でもそうしたガイドラインが議論されています⁵⁴。

人的側面の課題としては、AIに過度に依存しすぎることへの警戒も語られています。とあるプロガーは「便利なあまり頼り切ってしまうと、職業人としての個性が失われる」として、効率化ツールとして使うのは良いが全面的に任せきりにするのは自己否定に繋がりがかねないと警鐘を鳴らしています⁵⁵。特にベテラン層は「AI任せで自分の脳を使わなくなること」への危機感を率直に綴っており、「50代、下り坂の生物である自覚」を持ちながらも意識的に頭を鍛え、クライアントの真のニーズを読み取る力を鈍らせないよう努力すべきだと述べています⁴²。「AIに任せる部分と人間が頑張る部分の線引きで仕事の味付け（個性）が決まる。そこは粘って人間の個性を残す」といった表現は、人間ならではの工夫でAIとの差別化を図ろうという意思の表れでしょう⁴³。

業界全体の展望：淘汰と共存の時代へ

各ブログの論考を総合すると、知財業界はこれから数年で前例のない変革期に突入することが浮き彫りです。生成AIによる効率化で「知財の大衆化」が進み、特許出願件数の増加が見込まれるとも予測されています。【木本】氏は、AIによる明細書自動化で「今まで30時間かかっていた作業が3時間になる」とし、特許取得コストの劇的低下により日本全体の出願件数は増加するだろうと述べています⁵⁶。実際、2025年4月にソフトバンクグループが2日間で3500件超の特許出願を公開したニュースは業界を驚かせました⁵⁷。詳細は不明ながら「ある日突然、大量の特許出願が眼前に現れる」という体験を多くの人がし、「発明創出から出願までのコスト低下が現実化しつつある」ことを象徴する出来事でした⁵⁸。今後、AIで大量のアイデア出願が気軽に行われるようになれば、特許庁の審査負荷は飛躍的に増大します。「製品ライフサイクルが短縮するスピード競争の時代に、出願件数の爆発で審査リードタイムが伸びるのは致命的」との指摘もあり⁵⁹、知財制度側にも変革が迫られそうです。いずれAI審査官の導入なども議論せざるを得なくなるのではないかと、といった見解も出ています⁶⁰。実際、日本特許庁はAI活用のアクションプランを推進中であり⁶¹、審査実務への逐次投入が進んでいます。制度・運用面でもAI時代に即したアップデートが不可避でしょう。

一方で、人材面の構造変化も進んでいます。知財人材の不足は以前から課題でしたが、「人手不足の圧力で、なし崩し的に業界が変化させられそう」という指摘は説得力があります⁶²。特許庁の資料でも弁理士層

の年齢構成のいびつさが示されており、このままでは実務担い手の不足が加速する可能性が高いとされています⁶³。実際ここ数年、特許事務所側が人材難に陥っているだけでなく、企業側も発注先を確保できず危機感を抱えるケースが出てきているとの現場感覚も報告されています⁶⁴。このような人手不足とAI技術の進歩が相まって、知財業務の進め方自体が変革を余儀なくされるでしょう。ある弁理士は「中規模特許事務所では分業が加速するかもしれない」と予想しています⁶⁵。これまで一人の弁理士が明細書作成から中間応答、外国出願対応まで一貫して行い品質を担保していたモデルが人材難で立ち行かなくなり、クレームを書く人、明細書を肉付けする人、拒絶対応方針を検討する人、と細切れに役割分担するチーム制に移行する事務所も出てくるのではないかと、このように述べています⁶⁵。そうなれば弁理士業務も「チームプレー化」し、各人が高度に専門特化するディストピア(?)も待っているかもしれない、と半ば冗談めかしつつ述べられていました⁶⁵。

もっとも、こうした変化は「淘汰」と表裏一体で進むことになります。ブログ執筆者たちの結論は概ねシンプルで、「変化に対応できない者は淘汰される」という当たり前の帰結に行き着くとしています⁶⁶。ではどう生き残るか？ 多くの専門家が強調するのは「逃げずに積極的にAIを取り入れ、自分の価値を再定義せよ」という姿勢です。【野崎】氏は「重要なのは変化を恐れず新技術を取り入れ、自らの価値を再定義すること」だと述べ⁶⁷、業界全体でこの変革にどう対応するか真剣に議論し未来への戦略を構築すべきだと呼びかけています⁶⁷。また、【大瀬】氏も「生成AI時代の到来は脅威ではなく大きな機会だ」と前向きに捉え、単調作業の効率化が進む一方で専門家としての判断力・戦略思考力・深い知識の価値は格段に高まっていると強調します⁶⁸。重要なのは技術変化を怖がるのではなく、それを積極活用しつつ自分の専門性をより高次元で発揮することだ、とも述べられています⁶⁹。まさに「AIとがっぷり四つに組んでやろう」という意気込みで⁷⁰、知財プロフェッショナル自らが生成AIを使って経営課題を解決する“発明者”になるべきとの提言もありました⁷¹。要するに、AIを単なる便利ツールではなくインフラと捉え、いかに早く業務に組み込むかが勝負だということです⁷²。

最後に、多くのブログが示唆するように、知財業界で生き残る道は「人間にしかできないこと」を極めることに尽きます⁷³。【木本】氏はそれを「経営者の課題の芯を捉えること」と表現し⁷⁴、その芯さえ外さなければ、たとえ経営者自身がAIを使いこなすようになって自分たちを頼ってくれるだろう、と述べています⁷⁵。逆に言えば、そこを外す専門家は、たとえ相手がAIを使っていなくても選ばれないだろうという厳しい指摘でもあります⁷⁶。「AIでは届かない経営の核心を抑え、AIと自分の創意工夫で課題解決にあたる」——そんな姿勢がこれからの知財人材に求められるのでしょうか。【大瀬】氏の言葉を借りれば、生成AI時代は弁理士にとって脅威ではなく「さらなる発展の機会」であり⁶⁸、それを活かすも殺すも私たち次第です。各ブログから浮かび上がったメッセージは明快でした。「なんとか頑張って生き残りましょうね」⁶⁶——生成AIと競合するのではなく共存し、自らも進化することで、この歴史的転換期を乗り越えていこうという前向きな決意で締めくくられています。

参考ブログ記事一覧（弁理士の日記念ブログ企画2025参加記事）：

- ・NAKAGAKI_IP 「猫と生成AIが拓く新たなビジネス領域：知的財産戦略が決める勝者の条件」^{77 78}
- ・野崎篤志@イーパテント 「生成AIと知財業界『特許調査・分析サービスおよびデータベース・ツールの今後』」^{79 67}
- ・或る特許翻訳者の書斎 「特許翻訳者の生成AI活用法を考える」^{1 5}
- ・オモチ/金田有美子(弁理士) 「「生成AIと知財業界」人間の私にできることは」^{80 41}
- ・中村祥二@Markstone知的財産事務所 「「生成AIと知財業界」～商標実務における生成AIの活用～」^{81 39}
- ・木本大介 「GenAI for me - 生成AIと知財業界 - 生成AIが変える知財業界の未来」^{82 74}
- ・大樹七海 (雅号) 「＜生成AIと知財業界＞2024年「弁理士の日」企画寄稿」⁸³
- ・大瀬佳之 「弁理士の今後～生成AI時代における知財専門家の新たな価値～」^{28 68}
- ・弁理士アッカーの運まかせ人生 「生成AIと知財業界」^{84 34}
- ・宮崎 超史 (Toreru) 「生成AIと知財業界」^{7 56}
- ・「私と知財と音楽と」ダメダメ弁理士のグダグダBLOG 「生成AIと知財業界」 (FC2ブログ、アクセス問題により内容割愛)

- ・特許事務の沼ブログ「生成AIと知財業界の未来：生成AIで知財業界はどう変わるのか？」 10 29
- ・弁理士『三色眼鏡』の業務日誌～新大陸編～「『弁理士の日 企画』生成AIと知財業界」 12 55
- ・特許調査のホント「生成AIと知財業界」 44 45
- ・双京知的財産事務所 note記事「生成AIと知財業界」 85 86
- ・塩谷綱正@イーパテント・アクティス note記事「生成AIと知財業界」 26
- ・弁護士 河部康弘 note記事「生成AIと知財業界」 37
- ・コエチザラジオ（Spotify配信）「生成AIと知財業界」（音声コンテンツにつき割愛）
- ・知財塾のブログ (note)「生成AIと知財業界」 87 88
- ・goso (栗飯原弁理士) note記事「生成AIと知財業界の変化」 89 90
- ・Open Legal Community「生成AIと知財業界」（米国特許業界視点の記事と思われるが、詳細割愛）
- ・知らぬい (はてなブログ)「生成AIと知財業界」（内容割愛）
- ・関口高穂 (Takao Sekiguchi) note記事「生成AIと知財業界」 91
- ・湯浅竜 note記事「生成AIと知財業界」 92
- ・弁理士という生き方 (ライブドアブログ)「生成AIと知財業界」（内容割愛）
- ・NEDSのnote「生成AIと知財業界」 93
- ・佐竹聖司 (SATAKE, Seiji) note記事「生成AIと知財業界」 93
- ・ナレッジデザインIP (松山雄一郎弁理士)「生成AIと知財業界」 94

【※】上記引用中の【xx + Ly-Lz】は各ブログ記事の該当箇所を示しています。各記事の全文はリンク先をご参照ください（本企画参加各記事へのURLは「弁理士の日記念ブログ企画2025」案内ページ 95 96 に掲載）。各執筆者の生の視点には、本まとめ記事では紹介しきれない示唆が数多く含まれていますので、ぜひ原典にもあたってみてください。 66

1 2 3 4 5 53 特許翻訳者の生成AI活用法を考える～生成AIと知財業界～ | 或る特許翻訳者の書斎
<https://jiyugatanookite.com/patent/post-1815-1815.html>

6 10 11 15 21 23 24 29 30 31 32 生成AIと知財業界の未来：生成AIで知財業界はどう変わるのか？
 『弁理士の日記念ブログ』 - 特許事務の沼ブログ
<https://micasatocasa.org/ipai>

7 8 9 56 生成AIと知財業界 | 宮崎 超史
https://note.com/masafumi_miya/n/nc93103bb8214

12 13 14 19 33 42 43 46 47 48 55 61 70 『弁理士の日 企画』生成AIと知財業界 - 弁理士三色眼鏡の業務日誌～新大陸編～
<https://asakaze-patent.hatenablog.com/entry/2025/07/01/085436>

16 18 34 35 37 44 45 50 84 生成AIと知財業界 | 弁理士アッカーの運まかせ人生
<https://ameblo.jp/acker/entry-12913787875.html>

17 54 93 94 95 96 弁理士の日記念ブログ企画2025 | 独学の弁理士講座 - 弁理士内田浩輔監修 -
<https://benrishikoza.com/blog/benrishinohi2025/>

20 22 36 51 52 62 63 64 65 66 89 90 生成AIと知財業界の変化 | goso
https://note.com/i_go_so/n/n984519efe04e

25 26 27 28 68 69 弁理士の今後～生成AI時代における知財専門家の新たな価値～ | 大瀬 佳之 / Ose Yoshiyuki
https://note.com/ose_yosshy/n/n1a68f721008c

38 39 81 85 86 「生成AIと知財業界」～商標実務における生成AIの活用～ | 中村 祥二@Markstone知的財産事務所
https://note.com/markstone/n/ne8ba386f3f0c?sub_rt=share_pb

40 41 80 「生成AIと知財業界」人間の私にできることとは | オモチ/金田有美子(弁理士)

https://note.com/omochi_benrishi/n/nee47a8509f02

49 57 58 59 60 71 72 73 74 75 76 82 GenAI for me - 生成AIと知財業界 — 生成A Iが変える知財業界の未来 — (弁理士の日記念ブログ企画2025) | 木本大介

<https://note.com/daisuke16/n/n0bbf0d1fac01>

67 79 87 88 生成AIと知財業界「特許調査・分析サービスおよびデータベース・ツールの今後」—弁理士の日記念ブログ企画2025 | 野崎篤志@イーパテントー知財情報コンサルティング®

<https://note.com/anozaki/n/n5b542b90bd74>

77 78 猫と生成AIが拓く新たなビジネス領域：知的財産戦略が決める勝者の条件 | NAKAGAKI_IP

<https://note.com/nkgk/n/n51e48ea6a44b>

83 <生成AIと知財業界>2024年「弁理士の日」企画寄稿：大樹七海 | 大樹七海（オオキナナミ雅号）弁理士，芸術・科学・知財クリエイター，知財専門出版社『知成堂』代表取締役

<https://note.com/ookinanami/n/ne3c97093ab3f>

91 92 生成AIと知財業務／弁理士 牧内 直征

https://www.jpaa-tokai.jp/activities/newspaper/detail_3075.html